

表現の技法に着目して心情を把握する力を高める中学校国語科学習指導の工夫 — 評価ルーブリックを生かした朗読のための読解ワークシートの作成を通して —

熊野町立熊野東中学校 谷崎 栄子

研究の要約

本研究は、文学的な文章における心情を把握する力を高める中学校国語科学習指導の工夫を考案したものである。文献研究から、本研究における心情を把握する力について、直接的、間接的な心情表現に着目し、その表現の分析を基に登場人物の気持ちを推論することができる力であると定義した。この力を高めるために、朗読を言語活動に設定し、評価ルーブリックを段階的な構造で示した、朗読のための読解ワークシートを用いた学習活動を行った。生徒は、学習の進捗状況を自分で把握しながら学習活動を進め、表現の技法に着目して分析したことを基に推論し、心情を具体的に把握することができるようになった。このことから、評価ルーブリックを生かした朗読のための読解ワークシートを用いた学習活動を取り入れることは、表現の技法に着目して心情を把握する力を高めることに有効であるといえる。

キーワード：心情を把握する力 表現の技法 朗読 ルーブリック

I 研究題目設定の理由

広島県「基礎・基本」定着状況調査において、登場人物の心情の把握をみる問題は、平成21年度から4年間続けて通過率が60%未満であり、広島県の継続した課題となっている。平成21年度広島県「基礎・基本」定着状況調査報告書は、直接的な心情表現や、登場人物の動作、態度、表情、情景、比喻などの間接的な心情表現を手掛かりにして、心情を捉えることの必要性を指摘している。また、「全国学力・学習状況調査の4年間の調査結果から今後の取組が期待される内容のまとめ～児童生徒への学習指導の改善・充実に向けて～（中学校編）」（平成24年）では、「目的をもち、表現の仕方や文章の特徴に注意して読むこと」¹⁾が指摘されている。

これらのことから「心情を把握する」という課題を解決するためには、心情に関わる表現に着目し、それを手掛かりにして心情を捉えていくことが必要になるといえる。

そこで、本研究では、心情を把握する力を高めるために、朗読を言語活動に設定した学習活動を考案した。朗読を通じた学習の特徴は、一人一人が自分なりに解釈したことや、感動したことなどを、文章全体に対する思いや考えとしてまとめることができる点にある。朗読を目的として繰り返し文章を読めば、生徒自ら文章の表現に着目することができ、その分析を通して、作者の意図や登場人物の心情を把

握できるようになると考えられる。

国立教育政策研究所は、言語活動として朗読を行う場合の評価規準と、その評価を行うための「朗読シート」を、具体例と共に紹介している。本研究では、この「朗読シート」に工夫を加え、生徒が表現を手掛かりにして段階的に心情を把握することができ、また、教師が生徒の学習状況を視覚的に判断しやすくなるワークシートを作成することにした。

具体的には、朗読を扱った指導における読む能力の評価規準・判断基準を具体的に設定した評価ルーブリックを作成する。また、評価ルーブリックにおける基準が反映されるようなワークシートを作成し、表現の技法に着目して段階的に読取りを深め、心情を把握できるようにする。そして、読取りの段階が生徒にも視覚的に分かるようにする。

このような工夫をすることによって、表現の技法に着目して心情を把握する力を高めることができると考え、本研究題目を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 表現に着目して心情を把握することについて

文学的な文章において「心情を把握する」とはどのようなことだろうか。

中学校学習指導要領解説国語編（平成20年、以下

「解説」とする。)「C読むこと」に、「文学的な文章を読むためには、言葉を手掛かりにしながら文脈をたどり、視点を定めて読むことが必要」²⁾と述べられている。

「心情を把握する」ことについて、中学校の教科書を見ると、「中学生の国語 学びを広げる 一年」(平成24年)は、「人物の会話や行動・態度・表情とその表現から、また、周りの情景とその表現から想像する。」³⁾のように、直接的・間接的心情表現から心情を捉えることを説明している。

田近洵一(2013)は、人物の心情を読むという学習において、子供が恣意的な読みをしないよう、言葉を捉えてその意味を問うという想像行為の基盤を養うことの重要性を述べている。

これらのことから、文学的な文章において心情を把握するということは、直接的・間接的心情表現に着目し、その表現の意味を問うことを分析の基礎として、表現と心情の描かれ方の関係や、表現と作者の意図の関係を推論し、表現と心情を関連付けて捉えることであると考えられる。

なお、表現に関する用語として、中学校学習指導要領(平成20年、以下「指導要領」とする。)第1学年には、「比喩や反復などの表現の技法」⁴⁾が示されている。「表現の技法」とは、比喩や反復、擬声語・擬態語、誇張、省略、倒置、対句などの技法の総称といえる。「指導要領」には、表現に関してより広範囲の事項を包括するものとして、第1学年で「表現の特徴」、第2・3学年で「表現の仕方」という文言も用いられている。本研究では、表現を捉えてその意味を問うという分析の基礎を生徒に身に付けさせるために、生徒に捉えさせる心情表現を、表現の技法に限定した方が分かりやすいと考え、表現の技法に着目して心情を把握する力を高める学習指導の工夫を考案する。

2 朗読を言語活動として設定することについて

「指導要領」では、朗読は、「C読むこと」の言語活動例として扱われている。文学的な文章の内容の理解に触れる言語活動として、「言語活動の充実に関する指導事例集【中学校編】」には、「感想を交流する」事例や、「批評する」事例、「朗読する」事例が示されている。このうち、朗読については、「登場人物の心情や行動、情景描写に注意して読み、内容の理解を深め」⁵⁾ることを目的とした言語活動とされている。また、「解説」には、言語活動とし

ての朗読について、小学校で学んだことを踏まえて「文章の内容についての理解を深めたり、感じたことや考えたことを声に表したりすることをねらい」⁶⁾として、「作品の形態や特徴を生かしながら朗読したりすることを通して、文章の理解を一層深める活動を行うこと」⁷⁾と示されている。

そこで、本研究においては、登場人物の心情を把握するねらいを達成する上でふさわしい手段として、「朗読」を単元を貫く言語活動に設定した。生徒は朗読をするために、表現の技法に着目し、登場人物の心情を把握する学習活動を行っていくことになる。

3 朗読を扱った学習活動の工夫

「教育科学 国語教育」における2008年から2012年の朗読の実践報告を見ると、朗読という言語活動そのものが評価の対象となる学習活動を行っている事例が多く見られる。

この点について、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校 国語】」には、「言語活動を評価するのではなく、指導事項に基づいて指導した内容について評価する」⁸⁾ことに留意し、言語活動として朗読を行う場合の評価規準と、その評価を行うための「朗読シート」が、生徒の記述の具体例と共に示されている。この「朗読シート」は、上段に朗読の工夫を、下段にその工夫を用いる理由を記述できるようになっており、結論と理由が視覚的に結び付けられる構造になっている。これは、朗読をするために、登場人物の心情や行動、情景描写に注意して、内容の理解を深めているかを下段の記述から評価しようとするものである。しかし、二段構成の「朗読シート」では、生徒が文章中のどの表現に着目し、その表現をどのように意味付けて内容の理解を深め、下段の記述に至ったのかが明確でないため、評価することが難しい。

本研究では、生徒に登場人物の心情を把握する手立てをより確実に習得させるために、この「朗読シート」の下段を細分化し、生徒に学習の過程を評価規準に沿って段階的・視覚的に示すと同時に、根拠として文章中の表現の技法に着目させるようなワークシートを作成する。また、このワークシートを用いることによって、教師が生徒の学習の進捗状況を段階的に見取り、複数の教師が評価する場合であっても判断基準が統一できるよう工夫することにした。

4 評価ルーブリックを生かした朗読の指導 (1) 評価ルーブリックとは

一般的に、ルーブリックは、質的な評価の判断基準を記述したものと理解されている。

高浦勝義（2004）は、欧米でルーブリックと呼ばれているものを「評価規準と評価基準を評価資料・情報とともにセットにして作成されたもの」⁹⁾と説明している。ここで述べられている「評価基準」は「判断基準」と同義である。

本研究では、評価規準と判断基準をまとめたものを「評価ルーブリック」と呼び、一般的に呼ばれる

ルーブリックと区別することにする。高浦の挙げた「評価資料・情報」は、事前に生徒の朗読に関する成果物などの評価資料・情報が手元にあるとは限らないため、含めないこととした。

(2) 評価ルーブリックを生かした朗読のための読解ワークシートによる指導

本研究では、心情を把握する力の向上につながるように、教師と生徒の双方が評価ルーブリックを生かす授業を考案する。

表1 「あの坂をのぼれば」の評価ルーブリック

指導事項		評価規準	判断基準			評価の方法
			A「十分満足できる」	B「おおむね満足できる」	C「努力を要する」	
国語への関心・意欲・態度に関する評価		①朗読の工夫を考えるための活動に意欲的に取り組もうとする。 ②自分の考えた朗読の工夫を意欲的に実践しようとする。				観察 ワークシート
C読むこと	ア	文脈の中における語句の意味を的確にとらえ、理解すること。 【語句の意味の理解】	③-1 「坂」「海」の隠喩の意味を文脈と自分の体験等と関連付けて考えている。	「坂」「海」の隠喩の意味を文脈から考えている。	「坂」「海」の隠喩の意味を文脈から考えていない。	まとめ ワークシート
	ウ	場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容の理解に役立てること。 【文章の解釈】	③-2 文章から心情に関わる表現の技法が用いられている部分に加えて、他の表現の仕方を抜き出している。	文章から心情に関わる表現の技法が用いられている部分を抜き出している。	文章から心情に関わる表現の技法が用いられている部分を抜き出していない。	※ 朗読のための 読解ワークシート
	エ	文章の構成や展開、表現の特徴について、自分の考えをもつこと。 【自分の考えの形成】	④-1 心情に関わる表現の技法を含めた表現の仕方に気付き、その効果を文脈上の意味を捉えたり、他の表現と比較したりして分析している。	心情に関わる表現の技法の効果について文脈上の意味を捉えたり、他の表現と比較したりして分析している。	心情に関わる表現の技法の効果が分析されていない。	
	オ	文章に表れているものの見方や考え方をとらえ、自分のものの見方や考え方を広げること。 【自分の考えの形成】	④-2 表現の技法を含めた表現の仕方の分析や、他の場面の表現の仕方の分析から、前後の文脈とのつながりを考えて、その場面の「少年」の心情を推論し、把握している。	表現の技法の分析を基に、前後の文脈とのつながりを考えて、その場面の「少年」の心情を推論し、把握している。	表現の技法の分析を基に、作者の意図や少年の心情を推論できていない。	
			④-3 推論した「少年」の心情について文章の展開の関係を捉え、心情の変化が相手に伝わることを意識して朗読の工夫を考えている。	推論した「少年」の心情について、相手に伝えることを意識して朗読の工夫を考えている。	推論した「少年」の心情を相手に伝えようと意識した朗読の工夫ができていない。	
			⑤-1 他者との交流を基に、作品全体の展開を捉えて、自分の分析や解釈の妥当性を考えている。	他者との交流を基に、自分の分析や解釈の妥当性を考えている。	他者との交流を基に、自分の分析や解釈の妥当性を考えていない。	相互評価 シート
関連する 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】			⑤-2 他の班の朗読を聞いて、自分の解釈と比較し、互いの妥当性を考えている。	他の班の朗読を聞いて、自分の解釈と比較している。	他の班の朗読を聞いて、自分の解釈と比較することができていない。	
			(1)イ(オ)	比喩や反復などの表現の技法について理解すること。【表現の技法の理解】		「読むこと」アに関わって指導・評価する。

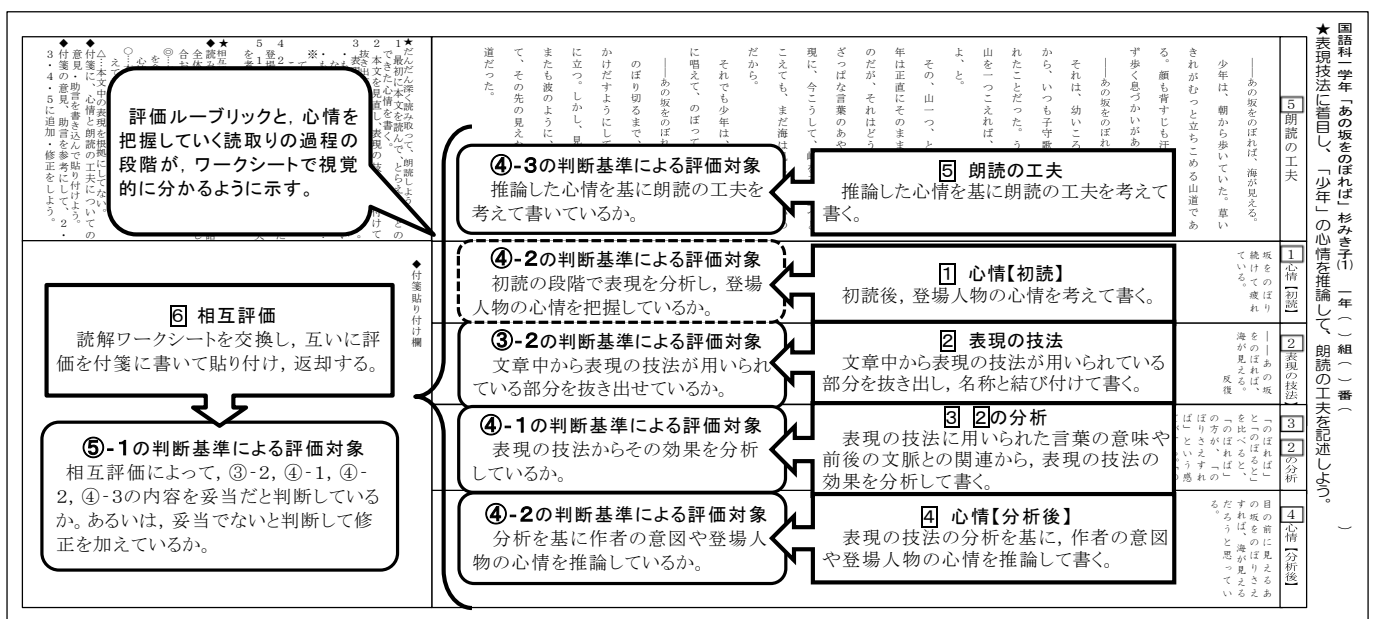


図1 「あの坂をのぼれば」の評価ルーブリックを生かした朗読のための読解ワークシート
(図中の「○-数字」は表1の評価規準と対応する)

表 2 評価ルーブリックを生かした教師の指導と生徒の学習活動の進め方(例)

	教 師	生 徒
【1】	評価ルーブリックを基にプレテストなどで診断的評価を行い、生徒実態を把握する。	
【2】	「朗読で伝える」という目的を提示し、評価ルーブリックと「表現の技法に着目して登場人物の心情を把握し、その心情が伝わるように朗読すること」という課題を、読解ワークシートによって示す。	「朗読で伝える」という目的を把握して、評価ルーブリックを基に、どのような読む能力が必要なのかという課題について確認する。 具体的には、「表現の技法に着目して登場人物の心情を把握し、その心情が伝わるように朗読すること」を課題として確認する。
【3】	生徒が課題を解決できるよう、必要な指導を行っていく。	課題を解決するために、読解ワークシートを用いて、学習材を繰り返し読みながら学習を進めていく。 実際には、表現の技法が用いられている部分を抜き出すことから始め、その意味の分析、作者の意図の推論、登場人物の心情の推論、それらを踏まえた朗読の工夫、という段階に応じて心情を把握する力を身に付けていく。
【4】	提出された読解ワークシートを基に形成的評価を行い、生徒一人一人の学習過程における成果と課題を見取る。	学習の過程で読解ワークシートを用いて、その時点までの成果と課題を捉え、より具体的な課題を次の学習活動の目標として設定する。 例えば、読解ワークシートへの記述から、「重要な表現の技法を抜き出すことはできているが、その効果についての分析が十分でない。」と判断すれば、次の学習活動の目標は「表現の技法の効果について分析を行ってから、登場人物の心情を考える。」となる。
	【4-1】で見取った成果と課題を基に、生徒が課題解決するために必要な手立てを考える。 例えば、他の表現の技法との比較や、言葉の入れ替えによる比較など、具体的な分析の方法を示す。	
【5】	生徒が自己評価できるよう、必要に応じて助言する。	読解ワークシートを用いて、単元の学習を振り返り、「表現の技法に着目して登場人物の心情を把握し、その心情が伝わるように朗読すること」が達成できたか、自己評価を行う。
【6】	評価ルーブリックを基に読解ワークシートやポストテストなどを用いて総括的評価を行い、次の単元の指導事項や指導方法を具体化する際にも、その結果を生かす。	

*下線は稿者による。読解ワークシートを用いた学習活動に関わる部分。

教師は、事前に設定した評価ルーブリックを、診断的評価・形成的評価・総括的評価に生かし、生徒にはワークシートという形で示す。このワークシートを、本研究では、評価ルーブリックを生かした朗読のための読解ワークシート（以下読解ワークシートとする。）と呼ぶ。例として、研究授業で用いた中学校第1学年の学習材「あの坂をのぼれば」の評価ルーブリックを表1とし、読解ワークシートを図1として前ページに示す。この読解ワークシートを用いて、表1の評価ルーブリックの※の太枠内の部分を評価していく。

この読解ワークシートには、評価ルーブリックの判断基準が段階的に示されている。一段ずつ学習活動を進めることによって、一つの判断基準が測れるようになっていく。心情を把握するための手立てとしては、根拠となる表現の技法を理解する段階〔2〕、表現の技法を分析する段階〔3〕、分析の内容と心情を関連付けて推論する段階〔4〕を設けた。これによって、生徒は読解ワークシートの段ごとに自分の学習の進捗状況を判断し、心情を把握するために次にどのような学習活動を行っていくか、目標を設定することができる。また、教師は読解ワークシートを段ごとに評価することによって、生徒の一人一人の学習の進捗状況を確認することができ、評価基準に即した適切な指導・助言が可能になる。

評価ルーブリックを設定した後、具体的には表2の手順で読解ワークシートを活用した指導と学習活動を進める。また、評価ルーブリックと読解ワークシート、教師の指導、生徒の学習活動の関わりをイメージしたものを図2に示す。

このように評価ルーブリックを生かすことができれば、教師は、個に応じた指導ができ、生徒は学習活動を進めながら心情を把握する力を向上させることができると思う。

Ⅲ 研究授業について

1 研究の仮説と検証の視点と方法

(1) 研究の仮説

文学的な文章において、評価ルーブリックを生かした朗読のための読解ワークシートを用いて朗読の学習活動を行えば、表現技法に着目して心情を把握する力を高めることができるであろう。

(2) 検証の視点と方法

検証の視点と方法を、次ページの表3に示す。

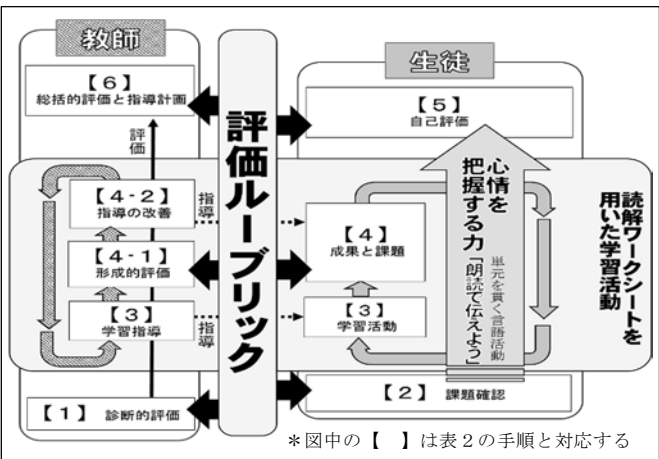


図 2 評価ルーブリックと読解ワークシート、教師の指導、生徒の学習活動の関わり

表3 検証の視点と方法

検証の視点（評価規準）	方法
① 比喩や反復などの表現の技法を理解できたか。 【語句の意味の理解】	プレテスト ポストテスト 読解ワークシート
② 表現の技法の効果を分析して作者の意図を捉え、登場人物の心情を把握し、朗読の工夫を考えることができたか。 【文章の解釈】 【自分の考えの形成】	プレテスト ポストテスト 読解ワークシート

2 研究授業の計画

(1) 研究授業の内容

- 期 間 平成25年12月4日～平成25年12月17日
- 対 象 所属校 第1学年(4学級126人)
第3学年(4学級150人)
- 単元名 朗読で伝えよう
- 学習材
第1学年「あの坂をのぼれば」 杉みき子
第3学年「戸村飯店青春100連発」 瀬尾まいこ
- 目標
文学的な文章から表現の技法を抜き出し、その技法の効果や意味について分析し、登場人物の心情を把握する。
- 二つの学年で実施することについて
本研究で用いる読解ワークシートの汎用性を確かめるため、第1学年と第3学年で実施する。

(2) 指導計画

次	主 な 学 習 活 動	
	第1学年（全6時間）	第3学年（全5時間）
一	<ul style="list-style-type: none"> 朗読で伝えるための学習について見通しをもつ。 本文を通読し、あらすじを捉える。 朗読と朗読の仕方について確認する。 班内で朗読する場面を分担する。 担当する場面を声に出して読む。 （1時間）	
二	<ul style="list-style-type: none"> 担当する場面を声に出して読む。 読解ワークシートの書き方と、主な表現の技法の名称と使い方について確認する。 自分が朗読する部分を読んで、初読の段階で捉えた心情を読解ワークシートに記述する。 表現の技法が用いられている部分を抜き出し、辞書で調べた意味を基に文脈上の意味を考えたり、他の表現と比較したりすることで分析し、表現の技法の効果や意味を捉えて読解ワークシートに記述する。 表現の技法について分析した結果を基に、登場人物の心情を推論して読解ワークシートに記述する。 読解ワークシートから自分の学習の進捗状況を判断し、次時の目標を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> 把握した心情を根拠に、朗読の工夫を考えて記述する。 同じ場面を読む相手と読解ワークシートを交換して相互評価し、記述内容を見直して解釈の妥当性を考え、加筆、修正する。 読解ワークシートから自分の学習の進捗状況を判断し、次時の目標を設定する。 （1時間） 班員同士で読解ワークシートを交換して相互評価し、記述内容を見直して解釈の妥当性を考え、加筆、修正する。 班で朗読発表のための準備、打ち合わせをする。 （1時間）
三	<ul style="list-style-type: none"> 二班一組で互いの解釈と朗読を発表し合い、着目した表現の技法とその分析、推論した心情について比較しながら聞き、相互評価する。 （1時間） 物語の展開と登場人物の心情の変化を確認する。 表現の技法の分析や心情の推論をした結果から、主題を考えて記述する。 （1時間） 	

(3) 各学年の実態に応じた指導の工夫

第1学年では、表現の技法を初めて学習することを踏まえて、表現の技法が用いられている部分を抜き出し、名称と共に記述する活動に十分な時間が取れるように配慮する（二次第2時）。また、より正確に表現の技法が分析できるよう、指導計画に「同じ場面を読む相手と読解ワークシートを交換して相互評価する」活動を入れる（二次第3時）。

第3学年は、プレテストにおいて表現の技法の使い方や効果と心情を関連付けて考えることができていないという実態が捉えられたため、表現の技法を分析する活動に重点を置く。具体的には読解ワークシート「2」で抜き出した表現の技法の中から一つを選ばせ、用いられている表現と似た表現の意味を辞書で調べて比較させたり、前後の文脈からこの場面の表現の技法がどのような意味で用いられているかを考えて記述するよう指導したりする（二次第2時）。

IV 研究授業の分析と考察

1 視点1 比喩や反復などの表現の技法を理解できたか

(1) プレ・ポストテストから

プレ・ポストテストの問一・二で「表現の技法の名称や具体的な用例を理解することができているか」を検証した。図3に、プレ・ポストテスト問一の正答数の割合を示す。

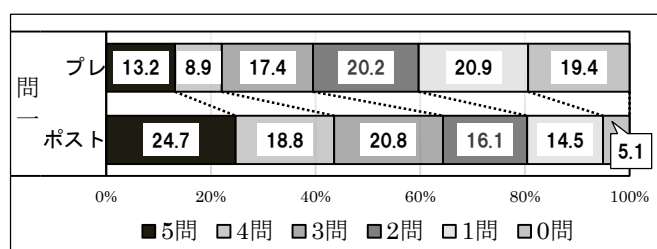


図3 プレ・ポストテスト問一（全5問）の正答数の割合（第1・3学年合計）

図3を見ると、問一の表現の技法の名称と具体的な用例を結び付ける問題について3問以上正答した生徒が増えていることが分かる。

また、問二の比喩の示す内容を理解し、文章中から適切に抜き出す問題については、2問中2問とも正答した生徒の割合が42ポイント上昇し、77%となった。

次に、読解ワークシートを用いたどのような学習

活動がこの結果に影響を与えたのかを分析する。

(2) 朗読のための読解ワークシートを用いた学習活動とプレ・ポストテストの結果との関連

学習材の表現の技法に着目し、表現の技法が用いられている部分を抜き出して、表現の技法の名称と共に記述する活動を読解ワークシートの「2」表現の技法で行った。プレ・ポストテストで、問一の正答数が0問から4問に上昇した第1学年の生徒aの読解ワークシートの「2」及び振り返りの記述内容を表4に示す。

表4 生徒aの読解ワークシート「2」及び振り返りの記述

	読解ワークシート2	振り返り
2時間目	〔未記入〕 * 文章中の表現の技法が用いられている部分のうち4カ所に印を付けている。	自分がわかった表現技法をプリントの文に丸をして印をすることができたので、2を次の時間に書きたい。
3時間目	「子守歌のように」直喩 「海が見えるんだよ、と。」省略法 「呪文のように」直喩 「半ばかけだすように」直喩 「少年はその頂に立つ。」文末の工夫 「長い長い」反復法 * 下線は稿者による。前時に印の付けられていなかった部分の抜き出し。	表現の技法の部分をたくさん書けたので良かったです。

生徒aの「2」の記述は、文章中の表現の技法への印付けから、表現の技法が用いられている部分と名称を含めた抜き出しに変化している。

このように変化した理由は、読解ワークシートが評価ルーブリックに対応した段階的な構造をしており、表現の技法を理解することに有効に働いたためだと考えられる。「2」の段階で、表現の技法が用いられている部分を抜き出し、名称と結び付けて記述することによって、同じ表現の技法の異なる用例や、同じ対象を異なる表現の技法で示す用例を捉えることができた。また、読解ワークシートを交換し、他の生徒から記述内容について指摘を受けたり、共に相談して表現の技法を見付けたりする機会を設けたことも効果的であったと考えられる。

2 視点2 表現の技法の効果を分析し、作者の意図を捉えて、登場人物の心情を把握し、朗読の工夫をすることができたか

(1) プレ・ポストテストから

プレ・ポストテストの問三で「登場人物の心情を把握し、朗読の工夫を考えることができていたか」「心情を推論するために必要な表現を抜き出し、その表現を分析して心情や朗読の仕方と関連付けることができていたか」を検証した。図4に、プレ・ポストテスト問三の問題を示す。

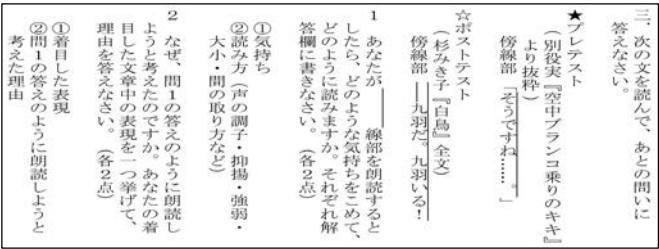


図4 プレ・ポストテスト問三

次に、問三の1について、解答類型を表5に、図5にプレ・ポストテストの解答類型別の割合を比較したグラフを示す。

表5 問三の1の解答類型

問	類型	正誤	備考
① 気持ち	1	◎	具体的に気持ちを記述したもの
	2	○	文末が気持ちを表す表現でないもの 朗読の読み方を加えて記述したもの
	3	△	具体を含まない感情のみを記述したもの
	4	×	その他の解答・無解答
② 読み方	1	◎	①の気持ちを表そうとする工夫をより具体的に書いているもの
	2	○	①の気持ちを表そうとする工夫を1つ以上書いているもの
	3	×	その他の解答・無解答

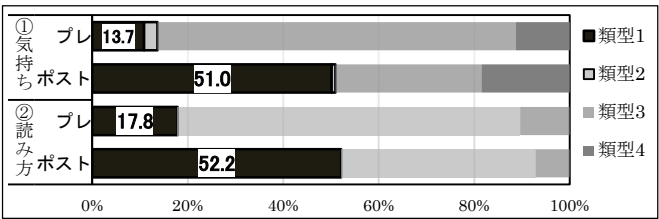


図5 問三の1の解答類型別の割合（第1・3学年合計）

図5を見ると、①の登場人物の心情を把握する問題について、具体的に心情を記述した生徒（解答類型1及び2の生徒）が37ポイント増加したことが分かる。また、②の心情をどのように朗読で表現するかを考える問題についても、工夫をより具体的に記述した生徒が34ポイント増加している。

「気持ち」や「読み方」を具体的に記述するためには、問三の2のように、文章中の心情に関わる表現に着目し、その表現が心情や朗読の読み方とどのように関連付けられるのかを考える必要がある。

次に、問三の2の解答類型を表6に、第1学年・第3学年の解答類型別の割合を次ページの図6・図7にそれぞれ示す。

表6 問三の2の解答類型

問	類型	正誤	備考
① 表現出	1	◎	問1の解答と関連する表現を選んでいるもの
	2	○	理由も加えて書いているもの 2つ以上選んでいるもの
	3	×	その他の解答・無解答
② 関連付け	1	◎	①の答えと関連付けて、問1の登場人物の心情について解答の理由を説明しているもの
	2	◎	①の答えと関連付けて、問1の傍線部の表記から音声での表現方法を考え、解答の理由を説明しているもの
	3	○	理由を表す文末になっていないもの
	4	△	①の答えまたは問1のどちらか一方のみ関連付けているもの
	5	×	その他の解答・無解答

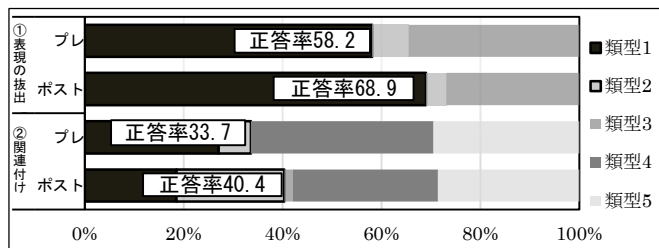


図6 問三の2の解答類型別の割合（第1学年）

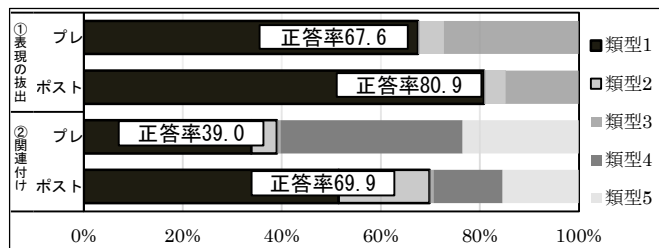


図7 問三の2の解答類型別の割合（第3学年）

図6・図7を見ると、①の心情を推論するために必要な表現を抜き出す問題の正答率は、第1学年で10ポイント増加し、第3学年で13ポイント増加していることが分かる。

一方、②の表現を分析して心情や朗読の仕方と関連付ける問題の正答率は、第1学年で7ポイント増加し、第3学年では31ポイント増加している。

この結果から、表現の技法に着目し、その表現を分析して心情や朗読の仕方に関連付けることを身に付けた生徒が増加していることが分かる。このことが、心情を具体的に把握する力の向上にもつながったものと考えられる。なお、第1学年より第3学年の結果に効果がよく表れたことについては、後述する（3 各学年の実態に応じた指導の効果）。

次に、読解ワークシートを用いたどのような学習活動がこの結果に影響を与えたのかを分析する。

(2) 朗読のための読解ワークシートを用いた学習活動とプレ・ポストテストの結果との関連

読解ワークシートの「[3] [2]の分析(表現の技法の分析)」で、抜き出した表現の技法を分析する活動を行い、表現の技法を分析した内容を基に心情を推論する活動を「[4]心情【分析後】」で、朗読の工夫を考える活動を「[5]朗読の工夫」で行った。

「[4]心情【分析後】」について、ポストテスト問三の1の結果が1点から4点に上昇した第1学年の生徒bの、読解ワークシートの「[3]」「[4]」及び振り返りの記述内容を表7に示す。

生徒bは、3時間目の「[3]」の活動で「光」の意味を調べた意味の中から、文脈の意味として捉えたものを心情と関連付け、「[4]」に記述している。こ

表7 生徒bの読解ワークシート「[3]」「[4]」及び振り返りの記述

	読解ワークシート[3]	読解ワークシート[4]	振り返り
3時間目	(光が走った→)太陽や電灯など自ら光を出して明るく照らすもの。希望の光。前途を見いだす望み。	[未記入]	皆のを見せてもらい、K君のが上手にまとめられていると思った。見習って私もがんばる！
4時間目	(光が走った→)太陽や電灯など自ら光を出して明るく照らすもの。希望の光。前途を見いだす望み。	少年があきらめかけている時に海鳥がいたので心を照らすもの。つまり明るく先に希望を持てたのだと思う。	J君にとってもアドバイスができた。プリントの推論を上手にまとめられました。

の記述から、「[3]」で表現の技法を分析し、「[4]」で分析した内容と登場人物の心情を関連付けて推論したことが、ポストテスト問三の結果の向上につながったものと考えられる。振り返りの記述からは、生徒bが読解ワークシートによって自分の学習の進捗状況を捉えていることが分かる。

生徒全体の振り返りの記述を見ると、79%の生徒が読解ワークシートによって自分の進捗状況を判断していた。また、約半数の生徒が自分の進捗状況を基に次の目標を具体的に設定していた。読解ワークシートによって段階的に評価ルーブリックを示すことで、生徒は、自らの学習の進捗状況を判断し、次の目標を設定して、学習活動に取り組むことができたものと考えられる。

また、教師も、読解ワークシートから学習の進捗状況を捉え、生徒一人一人の必要に応じて、表現の技法の見付け方や分析の比較対象を具体的に記したヒントカードを配付したり、助言を書いた付箋を添付したり、机間指導で適切な声かけを行ったりすることができた。例えば、読解ワークシート「[3] [2]の分析(表現の技法の分析)」で、体言止めの分析の仕方に迷っている生徒には、用いられている体言の意味を辞書で調べるよう助言し、その上で、直前に描かれた状況と比較して相違点を捉えるよう指導した。また、「[4]心情【分析後】」に、心情を一言だけ書いている生徒には、前後の文脈を再確認するよう助言し、何に対するどのような気持ちなのか具体的に記述するよう指導した。

このように、教師が生徒の課題を的確に把握することによって、適切な助言や指導を行うことが可能になり、生徒が表現の技法の分析の仕方を身に付けたり、分析を心情と関連付けて具体的に推論したりすることにつながったと考えられる。

「[5]朗読の工夫」では、第1学年・第3学年とも、抑揚・強弱・緩急・間の取り方に合わせて、「重々しく」「喜ぶように」など心情を補った記述が見ら

れた。また、第1学年では、担当した場面内で心情が切り替わる部分に印を付けている生徒が見られ、第3学年では、「よっしゃ行くぜ！」と気合を込めて」など心情を具体的に記述している生徒が見られた。これらの記述から、生徒は、朗読をするために登場人物の心情を把握することを意識して学習活動に取り組んでいたと考えられる。

1, 2から第1学年においても、第3学年においても、読解ワークシートを用いた学習が有効であったといえる。

3 各学年の実態に応じた指導の効果

第1学年では、読解ワークシート「**2**」の、表現の技法が用いられている部分を抜き出し、名称と共に記述する活動に十分な時間を取った。また、指導計画に「同じ場面を読む相手と読解ワークシートを交換して相互評価する」活動を入れた。

これらの工夫によって、文章中の表現の技法の用例と教科書の解説に挙げられた名称を結び付けて考えることや、個人では気付かなかった表現の技法に気付いたり、誤って記述していた名称を直したりすることができ、表現の技法の理解を確実にすることができたといえる。

第3学年では、読解ワークシート「**3**」の表現の技法を分析する学習に重点を置いて指導した。その結果、ポストテストにおいて、表現と心情を関連付けて解答した生徒の割合が34%から52%に上昇した。

次に、読解ワークシートを用いた学習活動後の第3学年の生徒の感想を示す。

○文章の表現技法の所は、今まではただ強調したりするだけだと思っていたけど、今回の授業を通して、その表現技法から、心情や情景を読み取る力がついたと思います。
○今までは読み方の工夫は考えていたけど、どうしてそうするか理由や分析をしたことがありませんでした。初めて試みて、文章の中にたくさんの表現技法があることを知り、それを深く考えると心情がくわしくわかっておもしろかったです。
○文の一文一文から、心情・様子・感情を読み取れるようになりました。また、分からない所はどうか仮説を立てるようになりました。

学習活動後の第3学年の生徒の感想

このように、第3学年では、着目する表現の技法を明らかにして、その表現の意味を分析し、心情や人物像に関連付けることができたといえる。

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

文学的な文章の指導において、朗読を言語活動に設定し、評価ルーブリックを生かした朗読のための読解ワークシートを用いて学習活動を展開することによって、表現の技法に着目して、その効果や作者の意図を分析し、登場人物の心情を具体的に把握する力が向上した。

学年別で見ると、第1学年では、表現の技法の用い方を帰納的に理解する点において特に有効であった。第3学年では、文脈を捉えて心情に関連付け、より具体的に登場人物の心情を把握することについて特に有効であった。

また、この指導の工夫によって、生徒自身が時間ごとに目標を設定し、学習活動に取り組むことができたことも成果の一つである。

2 今後の課題

学年間で授業の進捗やポストテストの結果に差が出たことから、朗読のための読解ワークシートについて、より汎用性がもてるよう、各学年の発達段階に応じて工夫し、指導の際の助言内容も考慮していく必要がある。

【引用文献】

- 1) 国立教育政策研究所教育課程研究センター(平成24年):『全国学力・学習状況調査の4年間の調査結果から今後の取組が期待される内容のまとめ～児童生徒への学習指導の改善・充実に向けて～(中学校編)』教育出版 p.10
- 2) 文部科学省(平成20年a):『中学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社 p.37
- 3) 文部科学省検定教科書中学校国語科用(平成24年)三省堂『中学生の国語 学びを広げる 一年』p.103
- 4) 文部科学省(平成20年b):『中学校学習指導要領』東山書房 p.22
- 5) 文部科学省(平成24年):『言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】』p.23
- 6) 文部科学省(平成20年a):前掲書 pp.38-39
- 7) 文部科学省(平成20年a):前掲書 p.39
- 8) 国立教育政策研究所教育課程研究センター(平成23年):『評価規準の作成,評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校 国語】』教育出版 p.64
- 9) 高浦勝義(2004):『絶対評価とルーブリックの理論と実際』黎明書房 p.55

【参考文献】

田近洵一(2013):『創造の<読み>新論——文学の<読み>の再生を求めて』三省堂